

---

# 2人はお似合い？

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2人はお似合い？

### 【Nコード】

N5232A

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

これは、名探偵コナンアニメ版の『大捜索9つのドア』の哀バーションです。展開も少し変わっています。

## （前書き）

名探偵コナンアニメ版の『大搜索9つのドア』から分岐したお話です。あの時も、コナンが帰っていたら・・・あの時、コナンでなく哀が捜査をしていたら・・・と考えて、書いてみたものです。長々となりましたが、本文へどうぞ。

私の名前は灰原哀。

帝丹小学校１年生で、少年探偵団の１人。

といっても、小嶋君達になかば強制的に入れられたんだけどね。

今日私達は、ある事件に出くわしていた。

その事件は、マンションのそばを通りかかった時に起きた。

上から、指輪とS字フックが落ちてきたのである。

3つを組み合わせると、『SOS』の形になる。

小嶋君、円谷君、吉田さんは、誰かがあのマンションのどこかに閉じ込められていて、助けを呼ぶためにこれを落としたと推理した。

私と工藤君は、しかたなく3人についていったが、イヤな事も起きた。

最初に訪れた部屋では、態度が悪い女の人に追い返されるし、次に犯人だと思って追いかけた2人組は、ただのカップルだった。

私達は、ひとまずマンションの玄関へ来た。

コナン「わかったか？ここには何も無いんだよ！オレはもう帰るからな！」

そう言って、工藤君は外に出て行ってしまった。

歩美「どうする？」

元太「そうだな・・・」

光彦「今日はもう帰りましょうか。」

哀「じゃあ、あなた達は先に帰りなさい。私、トイレに行きたいから。」

元太「そうか、じゃあなー！」

歩美「また明日ー！」

光彦「学校で会いましょう！」

哀「じゃあねー！」

小嶋君達が見えなくなったのを確認すると、私はコッソリとマンションに引き返した。

哀「工藤君は何もないって言ってたけど、やっぱりコレ、気になるわ・・・」

そう言つて、私は吉田さんから預かっていた指輪とS字フックを取り出した。

哀「どう考えても不自然だわ・・・もつとちゃんと捜査した方がいいかも・・・工藤君はもう帰っちゃったし、今回は私1人で捜査しなきゃ！」

私は、なんだかやる気が出てきてしまった。

哀「・・・っていうか・・・私さっきからトイレずっとガマンしてたのよー！！」

私は、急いでマンションの中に駆け込んだが、大変な事に気づいた。

哀「どうしよう！私、入れないじゃない・・・」

「どうかしたのかい？」

哀「え？」

私が振り向くと、さっきのカップルが立っていた。

「あら？この子、さっきの子供達の1人じゃない？」

「お嬢ちゃん、どうしたんだ？」

哀「実は・・・その・・・トイレに行きたくなっちゃって・・・」

私は、両手をモジモジさせながら言った。

「なんだ、そんな事ならオレ達の部屋のトイレ貸してあげるよ。」

「さ、来て！」

哀「あ、ありがとうございます・・・」

私は彼らについていき、トイレを借りた。  
その後、ジュースまでごちそうになった。

「じゃあな、お嬢ちゃん！」

「気をつけて帰るのよ！」

哀「ありがとうございます！」

私は彼らに別れを告げ、部屋をあとにした。

哀「さて、あの人の部屋はつと・・・」

私は、最初に訪れた態度の悪い女の人の部屋に向かった。

幸い、名前はメモしていたので、難なくたどり着いた。

哀「ここだわ・・・どうやって入ろうかしら・・・」

私がドアにもたれかかると、ドアがキーンツと開いた。

哀「あら？カギ掛けてないんだ・・・不用心ねえ・・・」

私は、何のためらいもなく部屋の中に入ってしまった。

哀「・・・ん？」

私が耳を澄ますと、部屋の奥から誰かのうめき声が聞こえてきた。

私は、そのまま奥の部屋に入り込んだ。

哀「あー！！」

私の目に写ったのは、手足を縛られ、さるぐつわをされた女の人の姿だった。

哀「や、やっぱりそうだったんだ・・・待ってて、今ほどこに行く

から・・・」

私はその時、完全に油断していて、背後から私に近づく人影に気がつかなかった。

哀「うつー!!!」

突然、私は背後から口をハンカチで塞がれた。

哀「むぐぐー!!!」

私はジタバタともがいたが、どう考えても大人の力に勝てるハズがなかった。

哀「うう・・・」

私は気が遠くなっていき、そのまま倒れて気絶してしまった。

哀「ん・・・」

しばらくして、私は目を覚ました。

哀「!!!!ん!んんっ!!!」

気がつくと、私は手足を縄でグルグル巻きに縛られ、口にさるぐつわをかまされていた。

哀「ん〜ん〜!ん〜ん〜!!!」

私はジタバタともがいたが、ダメだった。

哀「うう・・・」

私が途方にくれていると、あの女の人が部屋に入ってきた。

「あら、お嬢ちゃん・・・お目覚め?」

哀「ん!んんん!!!」

私は、女の人をにらみつけた。

「お嬢ちゃん、探偵ゴッコはほどにしておくものよ・・・」

私は、言い返す事ができなかった。

それ以前に・・・

情けなかった。

私は、工藤君のためにがんばると、あの日、心に誓ったはずだった。それなのに、こんなミスを犯して、犯人に捕まってしまうなんて・

私は、自分が情けなかった。

「さて、あそこの女は始末するつもりだけど、お嬢ちゃんはどうしようかしら・・・」

私は、ブルブルとふるえていた。

「あの女を消して、逃げるつもりだったのに・・・お嬢ちゃんが入って来ちゃうんだもの・・・」

女の方は、ふるえている私をジーツと見た。

「しかたないわ・・・口封じに、このお嬢ちゃんも始末しようかしら・・・」

哀「!!」

私は、ブルブルとふるえた。

私は、あの女の方が監禁されている現場を見てしまった。

それで、今、私はこの女の人に捕まっている。

この私に、選択の道は残されていなかった。

「お嬢ちゃんには悪いけど、あの女もろとも死んでもらうわ・・・」

そう言くと、女の方はナイフを取り出した。

哀「んんゝ!!んんゝ!!」

女の方は、ゆっくりと私に近づいてくる。

元はといえば、私の自業自得だ。

私が油断していたから、こんな事になってしまったんだ・・・

でも、私は死にたくなかった。

哀「（イヤだ・・・イヤだよ・・・私・・・まだ死にたくない・・・やりたい事、これっぽっちもやっていないのにさ・・・た、助けて・

・・・工藤君・・・!!!!）」

私は、涙を流していた。

女の方は、ナイフを振り上げた。



「覚悟しなさい・・・」

哀「んゝ！！！！（イヤァ！！！！）」

私が悲鳴をあげ、女の人がナイフを振り下ろそうとした、その時だった。

「そこまでだ！！！！」

「何！！？」

哀「（え？）」

私と女の人が振り向くと、そこには工藤君と、さっきの男女ペアが立っていた。

「ど、どうやって入ったの！？この部屋のドアには、カギを掛けていたハズなのに・・・」

コナン「この2人に体を支えてもらって、博士にもらった『何でも開けゝる』でドアを開けたのさ。」

「ク、クソ！」

女の方は、工藤君に襲いかかろうとしたが、それよりも早く工藤君が麻醉銃を放った。

パシユツ！

プスツ！

女の方は、気絶した。

コナン「灰原！！」

工藤君は私に駆け寄り、縄とさるぐつわを解いてくれた。

その向こうで、男女ペアのうちの男の方が犯人の女性を縛り、女性の方が捕まっていた女性を解放していた。

コナン「灰原、大丈夫か？」

哀「う・・・うう・・・江戸川君ゝ！！！！」

コナン「うわっ！！」

私は工藤君に抱きつき、泣き出してしまった。

哀「えゝん、えゝん・・・江戸川君・・・私・・・とても怖かったよあ・・・」

コナン「大丈夫だよ、灰原・・・」

工藤君は、泣きじゃくる私をそつと抱きしめてくれた。  
それからしばらくして、工藤君達と呼んだ警察が到着し、女は無事逮捕された・・・

普通なら、これで終わりなのだが、そうはならなかった・・・

翌日・・・

元太「コ・ナ・ンく・・・」

歩美「は・い・ば・ら・さくん・・・」

光彦「こ・れ・は、ど・う・い・う事ですか？」

コナン・哀「ど、どうしたの3人とも・・・」

私と工藤君は学校に着くなり3人に囲まれ、詰め寄られていた。

光彦「どうしたもこうしたもありませんよ！何ですか、これは！！」

そう言つて円谷君がバン！と机にたたきつけた今日の朝刊には、昨日の事件の事が一面に載っていた・・・

コナン・哀「あ・・・」

私と工藤君は、一面を見て、啞然とした。

一面には、私達の事がしつかりと書かれていたからだ。

『帝丹小学校少年探偵団の美男美女カップル、女性拉致事件を見事解決！！』『イヤー、あの2人は本当に頼りになるんですよ！佐藤君が、大人になったらぜひ警視庁に入れましょうとはりきってましてなー！』と目暮警部は語る・・・』

コナン「目暮警部・・・」

哀「私達の事は伏せておいてつて言つたのに・・・」

写真までついていては、もうごまかしようがない。

元太「オマエらあゝ！！」

歩美「また又ケガケしたわねえゝ！！」

光彦「許しませんよぉー!!」

コナン・哀「う・・・うわぁっ!!!!」

私と工藤君は、小嶋君達に追い回され、帝丹小学校内を逃げ回った。そして、彼らが私達を許してくれるまで、さらに3日かかった・・・

(後書き)

どうでしたか？よかったら、挿し絵のような物も送っていただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5232a/>

---

2人はお似合い？

2011年10月3日04時52分発行